

## 四瞳猛虎図修復研究ノート

馬場秀雄

### はじめに

倉敷民芸館所蔵の「四瞳猛虎図」の修復を通して朝鮮絵画における虎の図について表装形態の考察をおこなった。

本作品は 19 世紀に描かれたとされている。作品が倉敷民芸館に収蔵されたいきさつについては、初代民芸館館長の外村吉之介が民芸遍歴(1969 年・朝日新聞社)なかで前の持ち主で大正一昭和時代の古美術研究家および収集家と知られる料治熊太から倉敷民芸館のために譲ってもらいたいと何度も懇請した末に収蔵したものであると述べている。

その絵については、「絵は素人ばなれして本格の立派な仕事である。おそらく画家というような仲間のいなかった時代の、画工の筆であろうが、極めて高度な描法が駆使され、構図も甚だたしかである。」と評価している。

さらに、手に入れたときのエピソードとして、新聞記者仲間に「何しろ国宝に指定されるような、詰まらないではない」と話したため新聞記事になり物議をかました。その真意は、古い朝鮮の物で類の稀な絵であるとして、あの四国のある神社の襖に描かれた応挙の有名な絵が、国宝に指定されているなら、この絵はあのような浅薄なものではないというのであった。



倉敷民芸館所蔵「四瞳猛虎図」本紙

作品は、民衆から生まれ民衆のために描かれた絵画で朝鮮民画と呼ばれている。

内容は虎と鵲を描いた構図で、吉報を知らせる瑞鳥である鵲を僻邪の機能をもつ虎と共に描くことにより、さらに吉祥性を強めたタイプのもので、小鳥に追いやられる虎に身分差別への反発を象徴的表現したものとして二分される。（「朝鮮王朝の絵画と日本図録より」）

外村吉之介の解釈は、「虎王の面前に鵲のような小鳥が現われてさえずり騒ぐと、彼はやがて耐えがたい怒りの声をあげ、何処か立ち去ったという。」（「民芸遍歴・外村吉之介著」）であるとして、「四瞳猛虎図」と命名している。さらに、平成 25 年 5 月発行の民藝 725 号「特集外村吉之介の仕事」のなかで、日本民藝協会名誉会長の水尾比呂志氏は数ある虎の民画のなかでも、これをしのぐ作は見つからないと書かれている。

これらの作品解釈を踏まえて、東洋絵画(膠絵)における表装形態の見地から、朝鮮絵画「虎の図」研究ノートとして考察する。

## 表装形態について

東洋絵画(膠絵)は鑑賞や保存のために表装の形態とする。本作品は掛幅装(掛軸)の形態を取っている。

表装をするということは、作品(本紙)に着物を着せるということである。

作品(本紙)に表装を施すことにより、はじめて、掛け物として用いられる体裁が整い、その品格が備わるのである。

衣服はそれを着る人に似合うことが大切なように、掛け物の表装も、常に主たる絵画(本紙)に付随して、それを保護し、似合わなければならない。

この意味からも表装裂地のような副次的な部分は、さも端的に所有者の美的感覚や人間性理解の道標となり得る。

「民藝」104号・105号(昭和36年発行)に柳宗悦が「表具覚え書」として「もとより表具の装案には、第一に本書への理解が、最も緊要なのは申すまでも御座いません。若し本書の美しさへの理解に欠け、又それを正しく陳列し得る資格をも失うに至るかと思存します。」「何よりも先ず表具によって本書を更に美しく見せる責務があると存じます。」と述べている。表装の真髓が書かれている。

外村吉之介は「四瞳猛虎図」を収蔵した時の表装について「朝鮮の絵は決して珍しいものではない。しかし、掛物に仕立てた初生のものは稀だと思われる。この虎の絵はその珍しい例の一つであるが、シナや日本の表装のように、規矩を守った寸法や仕上げではない。

おそらく素人の仕事であろう。真に稚拙な子供の工作のような表具である。

軸木は直径三センチほどの丸木がつかわれ、軸端はそれが延びて両端六センチずつ出ている。

八双といわれる上の木部も、幅三センチほどの板がつかわれ、両端に六センチほど延ばしてある。

掛緒は中心に木綿糸の紐があるだけだ。絵の周辺は藍染の濃浅黄の紙、風帯も一文字もない。

掛けてみるとやや傾く。ここには精細な表具の心得は一切欠けていて、構えた何物もない。

そのためであろう。他のもろもろの朝鮮の物と同じように尽きせぬ愛情を招いてやまない。」民芸遍歴には、以上のように記載している。しかし、その後時期は判明しないが、外村吉之介存命中に藍染織の着尺をまとった表装に改装されている。(民芸館台帳に記載)しかし、表装形態は、最初の形態を継承している。



「四瞳猛虎図」全体図



ハ双



軸

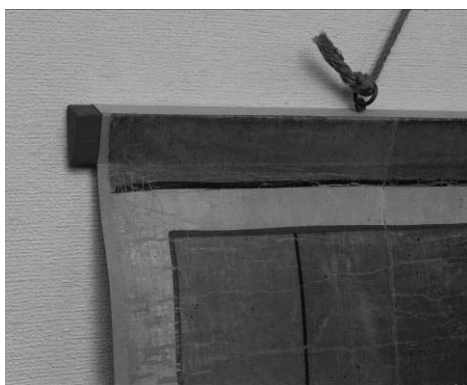
### 考察

今回修復を施した「四瞳猛虎図」の表装形態は袋表装で作品（本紙）の周辺を同じ裂で取回す形式である。主として文人画の表装に用いられることが多く文人表具ともいわれる。用いられた裂地は藍染織の着尺を用いている。外村吉之介の好み表装と思われるが、藍染織の表装裂地を使用した記載は見当たらない。

特質していることは、軸端やハ双が延びていることや、ハ双の断面が半円形ではなく、三角形の板状であることである。朝鮮絵画においてこのようなハ双を用いるのは禅師の真影（肖像画）などに見られる。



高麗美術館「金波堂禪師真影」全体図



八双

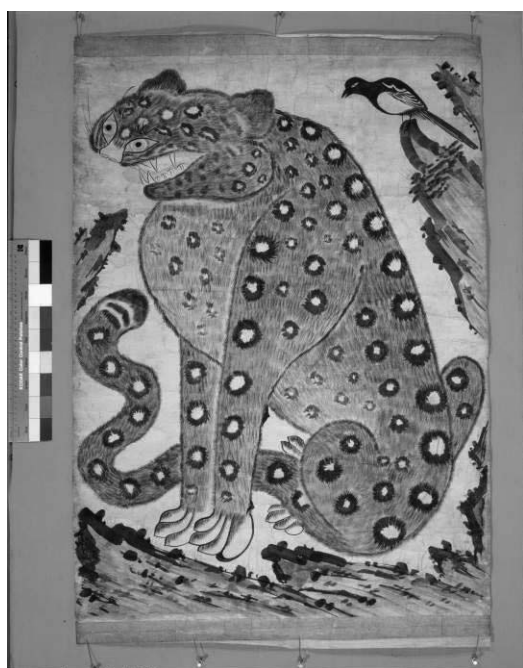
何故に朝鮮民画の代表とされる本作品（四瞳猛虎図）に用いられているのか、謎である。

### おわりに

本作品（四瞳猛虎図）を修復するに当たり、朝鮮絵画や朝鮮民画の表装形態に迫れるか、民藝への理解がどこまで深められるかを考察したが、深い霧の中をさまようだけに留まった。

18世紀以降「虎鵲図」に代表される民画としての虎の図が広く知られているが、実際は正当な画員による虎図は朝鮮時代初期から描かれている。本作品は専門画員の毛描き描写を受け継ぐすぐれた作品といえる。

過去に修復を依頼された「虎鵲図」の表装形態を示して報告とする。



高麗美術館「虎鵲図」 修理前



修理後

### 参考文献

1. 民藝遍歴・1969年朝日新聞社
2. 朝鮮王朝の絵画と日本展覧会図録・2009年
3. 民藝725号・2013年・日本民藝協会
4. 民藝104号・105号・1961年・日本民藝協会
5. 宮川智美著「外村吉之介にみる民芸運動の実践」修士学位論文・お茶の水女子大学・2012年
6. 朝鮮の仏さま・高麗美術館・2002年